

# 当院での栄養指導の試み ～自宅を訪問して～

援腎会すずきクリニック

○藤原麻美、荒川啓子、鈴木翔太、本田周子、鈴木一裕

# 日本透析医学会 COI 開示

筆頭発表者名： 藤原 麻美

演題発表に関連し、開示すべきCOI 関係にある  
企業などはありません。

## 【目的】

- 当院では開院以来、透析患者の栄養管理に力を入れてきた。栄養指導も導入後繰り返し行うことが重要であると考えているが、一部の患者では生活環境の把握が不十分なため、効果的な指導ができず問題となっていた。
- そのため平成27年4月より、患者の食事環境や食習慣を確認して食事療法を行う上での問題点を明らかにする目的で、管理栄養士が患者の自宅訪問を行っている。

## 【方法】

- 患者の非透析日に自宅を訪問し、調理を担当している家族同席のもと、食事環境や食品の嗜好、普段使用している食器、調理器具や調味料の使い方などについて本人や家族に聞きとり調査を行った。

# 【自宅訪問から栄養指導の流れ】

1. 訪問患者の人選

患者情報の提供



2. 患者・家族の承諾を得る  
(訪問日時設定)

3. 自宅訪問



4. 訪問記録作成  
今後の指導計画作成

5. 栄養指導・指導記録の提出・報告  
(訪問での確認事項も含む)



# 【訪問した患者の内訳】

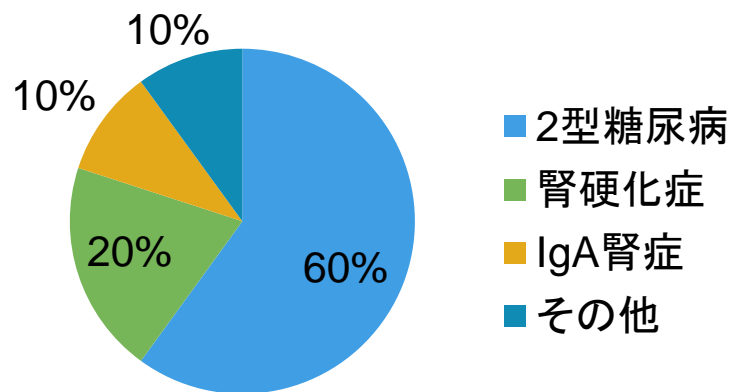
平成27年4月～平成28年5月

症例：10名（男性5名、女性5名）

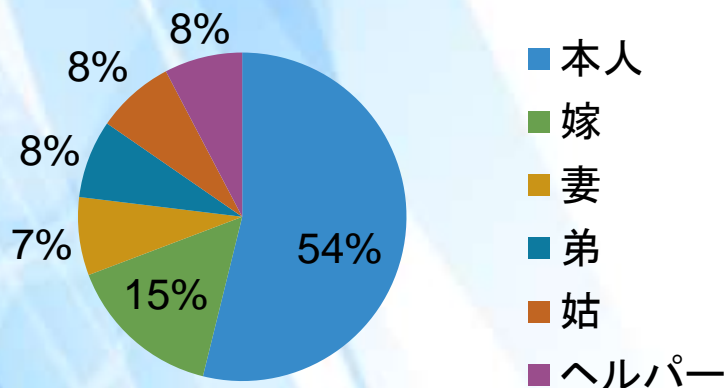
年齢：70.1歳

透析歴：3.01年

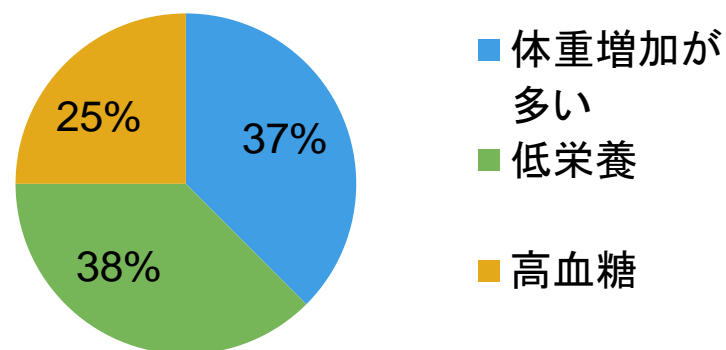
## 原疾患



## 調理担当者



## 問題点



※調理担当者と問題点は重複あり

# 【症例1】

- 〔年齢・性別〕 -  
〔原疾患〕 -  
〔透析歴〕 - 年  
〔同居家族〕 -  
〔調理担当者〕 -

## 〔問題点〕

- 高血糖 (GA:43.5%)
- 低栄養状態 (GNRI:86.2)



## ※訪問日 の昼食



### 〔確認できたこと〕

1. 訪問日の昼食内容はたんぱく質と野菜の不足、糖質性食品の偏りがみられた
2. 生鮮食品の調達がほとんど出来ていない
3. 調理済食品が多数常備されていた
4. 身近な場所にお菓子が置いてあり、無意識に間食の回数が多くなりやすい環境であった

### 〔評価〕

- 食事は調理済食品に依存し、生鮮食品の摂取が少なく、たんぱく質不足と栄養の偏りが感じられた
- お菓子などを身近に置き、間食が多くなりやすい環境であることや、糖質性食品の過剰摂取があとと思われる



## 〔訪問後の栄養指導と患者の変化〕

### ① お菓子の摂取と血糖の上昇について

- お菓子の買い置きをしない



- お菓子の摂取頻度が減った。(6カ月後GA.27.1% ↓↓)



### ② 肉、魚などの動物性食品を取り入れることの必要性を説明

- 1日の食事量と調理法などの指導



- 調理済食品の使用量が減少
- 生鮮食品を使用した料理をヘルパーさんに調理してもらうようになった  
(6カ月後GNRI:93.9 ↑↑)



## 【症例2】

〔年齢・性別〕 -  
〔原疾患〕 -  
〔透析歴〕 - 年  
〔同居家族〕 -  
〔調理担当者〕 -



### 〔問題点〕

- **体重増加量が多い**  
(DW:41.3kg 中1日:5%、中2日:8%)
- **低栄養状態** (GNRI:83.8)

## ※訪問日 の昼食



### 〔確認できたこと〕

1. 味付けは自分の味覚に依存
2. 自宅にある計量スプーンや秤が使用されていない(おたまを使用)
3. 訪問日の昼食は動物性食品の不足がみられた

### 〔評価〕

- 減塩の意義と体重増加の基礎的な知識の理解不足があった

## 〔訪問後の栄養指導と患者の変化〕

① おたまと計量スプーンに入る調味料の塩分の差を説明し、塩分の過剰摂取になることを指導

- 計量スプーンの使用法を指導



- 指導時には理解したように思われたが、実行には至らなかった

② 塩分の過剰摂取が体重増加の原因であることを説明

- 食事量は減らさず、指示量を摂取するよう指導



- 本人の理解不足があり、実行には至らなかった

(6ヶ月後GNRI:85.1 →)

今後は、本人の理解力や調理に対する考え方を考慮し、少しずつ段階を踏み、進めていきたいと考えている

## 【まとめ】

- 自宅を訪問することで患者の問題点となる背景などを知ることができ、その後の栄養指導は患者や家族とのコミュニケーションがとりやすくなり問題に添った指導がしやすくなった。
- 家族の食事に対する理解も得やすくなった。
- 自宅訪問は患者の食生活のすべてを把握することはできないが、ある程度普段の食環境を把握することは問題点の改善方法を考える上で有意義であると思われる。
- 今後も自宅訪問で得た情報をいかし、患者の問題点に寄り添った指導法を考えていきたい。